

地域と教育を考える県民フォーラム

5月11日(土)に、キャラホールにおいて約250人(高教組120人)の参加で開催しました。第1部のパネルディスカッションでは、菊池佳純さん、高木正基さん、熊谷貴典さん、佐藤浩之さんの4人の方が、それぞれの立場から、地域や教育に対する思いを述べました。コーディネーターと4人のパネリストのお話の概要を紹介します。

・コーディネーター 遠藤泉さん(岩手日報社)

「地域の教育を守るという視点は、行政との共通の認識になってきているという感じもある。少子化による数の問題一辺倒ではない視点も行政側に出始めているのではないか。そのような視点から地域の教育を考え、話をすすめていきたい。」

・パネリスト 菊池佳純さん(高校生:遠野緑峰高校)

「遠野緑峰高校で『牛飼い女子』として牛の世話や出産を体験する中で、命の大切さを知り、看護師志望である。世話をした牛の肉を文化祭で販売しているが、30分で売り切れるほど人気だ。入学する前には思ってもいなかったような色々な体験ができて、高校生活は大変楽しい。研究なども盛んだが、やればやるほど費用もかかる。これからも県や市の支援をお願いしたい。弟も緑峰高校に入りたいと言っている。遠野高校、緑峰高校どちらも地域に大切に必要の学校なので、残して欲しい。」

・パネリスト 高木正基さん(保護者:県PTA連合会)

「大槌学園のPTA会長をしてる。震災6年間はPTA活動ができず、今苦労している状況。保護者の皆さんも忙しく、なるべくなら役員になりたくないというのが本音。集まりにもあまり人が来ない。緑峰高校には大槌からも入学しているので、大槌高校も人が少なくなっているのかな。どの高校も生き残りをかけて頑張っている。大槌学園は、町をあげて子どもたちの育成に力を入れている。大槌高校の魅力化プロジェクトには3人の大槌高校教員が入っている。島根県の事例も1人のやる気ある人のとりくみで盛り上がっている。がんばりたい。」

・パネリスト 熊谷貴典さん(教職員:大東中学校)

「大東町を住みたい町トップ10に入りたいと、中学生たちと考えた。弁護士さんや議員さんにも話を聞いて、法的にもハードルを乗り越えて政策を作ったが、新聞には『仮想の町』として紹介された。子どもたちを未来の主権者として捉え本気になって話を聞いて欲しかった。学校は教育課程に追われて、地域の人と行事をする余裕がなくなってきている。小学校や中学校はかつては地域と強くつながっていたが、今は地域を知る機会が減っているのが残念だ。」

・佐藤浩之さん(労働界:岩手県交通労組委員長)

「バス会社というと3年4カ月前の軽井沢のスキーバス事故を思い浮かべる人もいると思うが、規制緩和以降に参入してきた業者と、従来から営業している業者とは安全を担保する考え方に乖離がある。私たちは通学の足を担う立場。高校生の通学時間帯に合わせたバスダイヤになっていることが多いが、高校の統廃合によってダイヤ改正があり、地域住民には不便になった結果、利用者も減り、ついには公共交通機関がなくなった例もある。地域の人は高校の統廃合問題が出てきたときに、そのことまで考えていただろうか。公共交通機関のあり方や地域の生活にも高校の存在は深く関わっている。」



パネルディスカッションの様子